



語林類葉

四

威洲縑

ホ 2
398
4





語林類聚卷之七

清水濱臣輯

けの部

一言

け 執とら。あきと常しほとん

長明無名抄上うりのあしをいみしうんをきの舎

と、八國王大臣の湯前卿と母をいそを全海免あしのあしに

をみあしあしの事こと。後頼無名抄百五十 此能

同法原の秋風を吹く白川の雲とをいみしうんの関をいけり

皇母をいみしうんの事こと。直海をいみしうんの袋抄子同

○活本枕冊子 玉杯ついで物 例の英學抄本
けとらる けとらる けとらる けとらる

け 気

万

権拾遺 和家武部

文庫二 経信

美も ちむらみあまのり ちむらみあまのり ちむらみあまのり

○宇の保 國讓上 物と母の ちむらみあまのり ちむらみあまのり

けいしん ちむらみあまのり ちむらみあまのり ちむらみあまのり

ちむらみあまのり ちむらみあまのり ちむらみあまのり ちむらみあまのり

暗病

師光集
と海里 けいしん ちむらみあまのり ちむらみあまのり ちむらみあまのり
丈木世二 分朝
けいしん ちむらみあまのり ちむらみあまのり ちむらみあまのり

け 鏡

四季談 十月 いま志しぬかとう 鏡をくい

け 耕 経ノ約

万二

け 珠

源 少女

あまのちかきまのまをけしけしうまをけし
をまて ○同 同 いとけしうまをけし ○真木柱 殿

も月念といふまをけしけしうまをけし
○新古今秋上 好忠 春をけしけし 朝顔の花 ○

け 故

崇祀

月宴 十七日

そのけ母をけ免○竹取 久母やあんや
し神のやま ○

け 實

異拾玉

山里のけをけ免○竹取 久母やあんや
遊系り記

月福集 卷下

架徑年並とよるる 架徑 隆

あけやあけをけ免○竹取 久母やあんや
後拾玉 卷下 架徑年並とよるる 架徑 隆

○大鏡

○土佐日記をとあもあもいふと

とあもいふとあもいふとあもいふとあもいふと
とあもいふとあもいふとあもいふとあもいふと

け

朝明 万七 ○ 朝開 万七 ○

け 筭の筭 飯
散本集 逆様
四方の海を 即ちのけしきしき海人 時々や身海も出
史水廿三

二言

けり 孝

茶花 廿七 月宴 ひとし海にけりしき 古久しよ ○

けり 伊呂波ノ終字京

高野日記伊呂波四十八字寄京

りり之ぬもをくまのくもとあふきいふけり海をけりしき
京ニ教ヲヨセタリ又 ○江談抄

け

盛衰記十九 伏殿ノ御座スル知ヲ黒腔カ、ケ
ウハケハハキテ ○同世七葉下々ヲハキ城戸
口ニ責寄テ

け 家児

竹取 古きを 毎まて けりしき けりしき 毎まて せんといひて

けし
堀百 信頼

夫木六 建長八年西暦分台 信実

山陰のあらしのやまのふりてのりて花吹雪のり
判者知家御方つゝのりてあつてはつて
書はいつゝのりてあつてはつて
えしりてあつてはつて
しはあつてはつて
あつてはつて

けむ ○ 請文

落之原 三 一ウ 男思ひんありやと云云 ○ 源

あつてはつて
あつてはつて
あつてはつて

三言

けし 月水

字つ保とては けしあつてはつて

けし
○ 顕昭のしりてあつてはつて
○ 音語類稿ニ出ス

けしき 字音轉訓

并乳母集

けしきを ぬらなりのきこふ中流の雲のみどり
 ○後撰意 四人のしりあひしりあひてうきを侍りけり
 けしきを見てあやの浦よりきこえ
 堀玉

○後撰離一 うらまへの女侍多しき侍りけり
 けしき ○伊物 けしきよ女侍の思ふきこはれ
 して ○後撰意 三きこふきこふけりけり
 けしき 小町 ○伊物 けしきをきこふ
 更木世一 祐奉
 神幸月山のけしききこふ村やのけしき

後拾遺 右大臣乳母

けしき 又きこふきこふきこふきこふきこふ
 同春上 世武初
 けしきの雲のけしきけりけりけりけりけり
 同春上・隆経

同同 右大臣北方
 同同

けさう 化粧

落くぬ 一上世三
 けしき けしきけりけりけりけりけりけり
 けしき ○紫花 けしき
 けしき けしき
 夜ノ中ヨリ身コ
 シラヘヌルナリ

けらめ

源 宿本 りらめま〜〇

けさす 酒さま〜

字の保 藤園 保のりまは母ま〜夕して大細言はま〜

テ十 〇同 同 だのおま〜りまはあはくも明きさ〜

し〜ま〜りま〜海ありま〜うま〜て海い〜

宰相は海い〇同 同 保ありま〜りまは三言ま〜

海ありま〜〇同 同 中細言武約々の高は海い〜け由

わらままけちん〜ふま〜ま〜ま〜ま〜

けふ 今日也〜助辞

保憲女集 ねりて千世ともい〜り〜海ま〜り〜ま〜

同 里人の道ま〜り〜雪も冷ぬま〜り〜や〜り〜日〜

万代神祇 大中内發空 やま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜

家集可 考

六帖山 大空やま〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
神代〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜
堀後正

四言

けりきり

字の係 祭使
え海んかた即ち海い舟とてしるはさるの
けりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
いしきりきりきりきりきりきりきりきりきり
ぬんしきりきりきりきりきりきりきりきりきり

けりきり

拾玉四 五十二 法華經陀羅尼品羅刹女等
けりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

○

けりやく 交易

延喜式一 交易商布の字川係 けりやくの舟

けりやくの舟 けりやくの舟 けりやくの舟

けりやく

けりやく 気清

為忠百首 仲正
古里ハ けりやく けりやく けりやく けりやく

けりやく

源 少女

○拾遺 古今俗の多海くとき

詞は因一〇真本柱 敵も用表しは良し一りき
海舟もてあひりして大なるもれしきあえふ

けさるも 毛衣

百代神祇 神出方

百葉二

保憲女集

〇 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

けさる

袂衣三

下十

けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

〇濱松四 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

〇愚管杖七 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

〇讚岐日記現しけさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

〇同習の母あけさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

〇 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣 けさるも 毛衣

けり

紫花 けり
けり
けり

けり

後撰 けり
今 けり
清 けり

同

けり
けり
けり

○

けり

けり
けり
けり

けり
けり
けり

けり
けり
けり

けり
けり
けり

けり
けり
けり

けり
けり
けり

署月取用之

けり

気志

茶室 月宴
枕冊子
源

烟屋 今有烟出シカ又ハ大火ヲタク下屋カ

今昔廿四廿七旧ク荒ヲ人氣ナシ屋共モ皆倒傾
テ只烟屋計残タルニ○

顕證

居家必用旧顕證謂知見阜端之人也○陳蓮曰

左旁知狀謂之見證 謔草○

五言

けりあま 真違
袋中子 範兼少キ有真違之氣○

枕冊子 十 廿七
源 東
増鏡 村
月廿六


~~~~~

けつ里花

古今物名 欠とけつ里花 ○同余枝集くそ

新古雅上 佛名ありけつ里花を以てて 朱雀街分  
同同 仏止院ありてありけつ里花のありけつ里花  
けつ里花のありけつ里花のありけつ里花のありけつ里花

○雲圖抄子圖も ○延喜式圖各式

けふさし

後撰

○拾遺貞外下 廿才

六言

京日くそ 今俗ニイフ若者ノ人童子ニハアラス

崇花 けつ里花のありけつ里花のありけつ里花のありけつ里花

けつ里花のありけつ里花のありけつ里花のありけつ里花

同鶏ノ 〇字つ保物類

外戚腹

後拾遺賀 大中臣捕長そ海のけつ里花のありけつ里花

けつ里花のありけつ里花のありけつ里花のありけつ里花

系系保昌朝臣



いゝゝのあやのあやとらふいゝゝのあやとらふいゝゝのあやとらふいゝゝのあやとらふ

○今俗妾腹ノ子ヲゲシヤクハラトイフ即外  
戚腹ノ字也但内外戚トイヘルハ内戚ハ父方  
外戚ハ母方ナレハコワ哥ニモオヤノオヤト  
ナトヨミテ嫡妻ノ子ヲイフナレ外戚ハ妾腹  
ノ意ナラヌヲイカ、心得テ外戚腹トイヒテ  
妾腹ノトトハナシケンオホツカナシオコラ  
クハ正字ニタトラヌモノ、下借腹ナト、ア  
テ字セシヨリノヒカコ、ロエニヤ○源  
若菜上九  
孟津抄外戚腹ナレハトセ○字つ保  
印本 初秋上  
藏本 冲津白浪

あゝあゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふ  
けいあゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふ  
けいあゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふ

七言

化菴遺テ

けいあゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふ

為忠後玉 顕唐

○ あゝあゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふいゝゝのあゝあゝとらふ

十三言



げうの子は花のんや

采花

月宴

又げうのんや  
○愚管扶賢の子賢のんや

十四言

けむのんやあひまのんや

學を

見まぬ言

この部

一言

某子

竹取内待中臣の子は花の多し ○大和物語

子 ○同 ちやつ

とま

○ちやつ

源大細

○源

胡蝶

いづ子 玉の ○

某籠

新千衣傷白う花を一つ 元良親王 ○

源 いづ子 花鳥田

花  
檜破  
破  
山スナノ



院子日御幸繪破子居御前云 ○拾遺雜賀大  
貳國章云 正海六のりはこくありて ○同 同 五月  
口よりいふことありしを山にけのちに入て為正の朝臣  
のむすめはしるるを道綱母 ○源 柏木 正のむすめ  
あふんそくはと○

某講カウ

二言

後拾遺釋教山階寺の涅槃一 ○同同故土津門  
右大月家の女房車三母子あはして菩提一 にはりて

涅槃一  
菩提一  
礼拜一  
河弥陀一

普賢一  
菩薩一  
迎一  
果一  
報恩一  
舍利一  
又舍利會

○統詞連哥日吉社の礼拜一 といふこと ○同同  
中まの 越後あゝ母謹かふいひりり ○拾玉七十八 文治  
六年二月廿八日山王一 ○源 松凡 といふことあり  
て月ふしは十四十五日つふといふことありしをよけん  
あふんそくは念佛方三昧をいふことありしをよけん ○河海十  
四日 普賢 十五日 阿弥陀 晦日 祇迎 ○宗花 疑六  
波羅密寺 中林院のほり一 ○同 同 といふことあり  
むし一 といふことあり ○同 市着蒙 今といふことありしを  
樓にいふことありしをいふことありしをいふことありしを  
新勅  
雜三報恩一 といふことありしをいふことありしをいふことありしを  
いふことありしをいふことありしをいふことありしをいふことありしを



をいひつゝはてしなくあり。○詞花雜下舍利講の

ついでに。

拾玉七 夏日舍利講演次同詠十如法文如哥  
如是縁とある。仏種もあはれなく、かたしそあらんりの舍利講

○舍利式 明恵作 李吟秋の榮花 とうの海し 又山の座

主山の舍利をせむことをうみうみとていへば

舍利會せんとも舍利の海はくみくもていへば

世の中の人々ももていへば海はくみくもていへば 中畧 先年にも山の

海はくみくもていへば海はくみくもていへば

とありしとていへば海はくみくもていへば

さしはくみくもていへば海はくみくもていへば ○金葉雜下醍

醐の舍利會の○古今別うらんらんのみまの舍利

會は山舟の海はくみくもていへば海はくみくもていへば

傳に遍照 ○余杖抄八〇三代実録第十三云貞

觀八年六月廿一日甲午為延曆寺立式四條其

二禁制供舍利會職掌僧闕急曰舍利者故座主

○壬二下前大僧の報恩禮のついでに 延用の

し、け 今も俗言にイナリアマリニ心アサクオモウキナキ意之

長明無名抄上あはれんさけきまていへばとや○同



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

五^ゴ師^シ

源 五^ゴ師^シの源 八幡宮五師貞觀八年別當安宗之取以運如法

師始補五師○

集^シ 其^シの集

崇^シ花 崇^シ花の集 和名華送具香輿 表^シ礼^シ國^シ乃^シ古^シ之 ○同同火輿

○和名華送具香輿 表^シ礼^シ國^シ乃^シ古^シ之 ○同同火輿

香^シ火^シ輿^シ
火^シ輿^シ
輿^シ

同^シ字^シ蠟^シ燭^シ輿^シ今^シ ○和名腰輿 太^シ古^シ ○竹取多^シく

按俗^シ字^シ火^シ輿^シ是^シ ○崇^シ花 う^シや^シく^シ乃^シ古^シ之 ○盛衰

記^シ十^シ二^シ讚^シ岐^シ院^シヲ^シ張^シ輿^シニ^シノ^シヤ^シ奉^シテ^シ○

大^シ社

直^シ相^シ而^シ見^シ而^シ者^シ耳^シ社^シ ○縣^シ居^シ翁^シ云^シ乞^シを^シさ^シを

と訓^シたり思^シひ社^シ母^シハ^シお^シを^シ祈^シ乞^シを^シめ^シを^シさ^シの^シ言^シを^シ社^シを

修^シむ^シら^シむ^シ

~~~~~



根 一 一  
香 一 一  
岩 一 一  
花 一 一  
妻 一 一  
むろ 一 一  
負 一 一

宇つ保 多 一 〇 小馬命婦集 〇 海 〇 入 〇 〇

源 夕 〇 北 〇 〇 〇 同日 右 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

甲 亀 一

六帖三 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

古 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

某 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇



日本紀古事記

枕冊子

三寸

を

を

三言

病

み

つ

ミリコ  
ヌルミ  
オコリ  
世の中

シクレ  
カセコ

水中

土佐日記

今昔

著聞

世間

事

か

後撰

拾遺

大



○玉葉雜一劫のそ 竹のほろの けね風あつた

今とて中つちのそ けね風あつた

玉葉雜一 神皇月の一りし人のそ けね風あつた  
人中日長 時雨のそ けね風あつた

凡雅雅上 けね風あつた

○

おさぢ 陸路の コサハ 和 障カ

拾遺 巻上 志の山 けね風あつた

御前

志の山 上 けね風あつた

おせり 小 芥

源 推木

雪ふり けね風あつた

おそて 小 神

言塵集序 けね風あつた

けね風あつた

家集下 けね風あつた

裕ノ小袖 = 白帷取具

取古 ○盛衰記四十五



全葉難上 大原の行運聖人の... 天台坐主仁光

○

六多い 古代

紫也 月宴 廿二

六多海 保憲女集

ふ... 河

○源 天狗六多海

六多海 樹神木神魍魎

響 大日經 九傳經曰魍魎山林異氣所生為人害

者也 ○今昔廿七 木等皆久シクナリテ樹

神ニ任スヘシ○

六多を

万廿世一

古度婆曾...

古今集序 ○六帖

題 六多の

出とみ 見物事







河海細分○源女出るゝのふまけそ大いゝのふまけ  
もつゝもつゝもつゝもつゝ○

おんい 金鼓

和名伽藍貝金鼓 和名比 哀加祿 又鉦鼓ノ條ニ金鼓ア

リ○拾遺雜春云んくくもゆり時相やゆり多を

之をみゆり 系原長純 ○新拾春上 百寺の金口

り多をみんくくもゆり○いほゆり 女とも

いほゆり 女とも 元浦集

物出寺 女とも ○枕丹子細

やゝゆり 女とも ○

江次第ニ圖書金鼓ヲ打テアリ○異本能宣集

秋百寺にんくくもゆり 女とも 紅葉のふり

ゆり 女とも ○今昔廿九 九 金鼓ヲ和

テ万ノ所ニ阿弥陀佛ヲ勸ノ行ケルニ

おんい 子持

袂衣ニ 上 五 四 大い 女とも ○葉

花 葉 王 葉 出る 女とも ○同衣珠 女とも のゆり

も物出 女とも ○ 女とも 花開 女とも のふり



い〜の女御○源 岩木  
三十○源 氷脈串  
子〜の 天も月頃 物を行〜お〜  
つ〜  
明石上

小弓

異本拾玉宴遊  
秋のい〜の 海と〜の 娘〜の 笑の 姿〜の 海〜の 小弓海を  
金葉雜上

○晴吟日記 丁の〜の 由〜の 小弓の 矣〜  
と〜の 源氏  
○字の 係  
後拾遺註

お〜み 曆

安七年三月四日 浴干熱海蓋三島曆以是日為  
上巳○

文木六 倭成  
〜の 花山 廿七 〇日用工夫集 空華 應

四言

拾玉四  
甜〜の 美〜の 安〜の 姿〜の 海〜の 小弓海を



○平家物語 古今物語のついでに

古今物語

古今物語上 意性

又海をこし 極くくをこし 海をこし 海をこし 海をこし

六帖 同

出づ海をこし 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

○コキマセハカキマセ也 古意ニ唯此をこし

道母ハ海をこし 余哉丹ハ海をこし

釈セリ 同海之○

心葉

玉小櫛 繪合 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし

玉小櫛 海をこし 海をこし 海をこし 海をこし















分鳥言告遺之何如告寸八〇拾遺子ハ大伴像  
見とてふとつてヤリトとさち  
〇中務内侍日記  
内侍よふ物にふとつけ〇  
言託母を今俗  
めとつけ

ふとつけ

保憲女集 八海を紙一印しりめしりかきと  
ふやう〇決石五世同ノ諺ニモニキレルカブ  
シエノル面ニアタラストテ云云〇同五ツル  
ノハキモキルヘカラスカモノハキモツリヘ  
カラス〇字つ保 〇  
さきい多山がそをらん〇

同 同 針あてふり子ハツキ 〇同  
るるの不 多あり母ハ  
胡蝶 世カ身との後のあやをそと 〇河海云  
後の親を親とせし  
部〇月を見しといひむ事 〇木をそれき 〇源  
行取下十九ウ  
セオセウ 頭書引諸書  
委注〇統世継 〇堤中納言 〇源 核笛  
あゑつる姫君帖  
〇字の保 祭使 昨日の日記 上  
〇遊系日記 上  
〇源 核笛 〇源































○字つ保 多くは

清狂公集

清狂公集

山家集下  
山くさくさもさかたけの  
心もみよきまをさす  
云々

山家集下

山家集下

山家集下

○竹取物語

○竹取物語

さくらのふり

謙徳公集

謙徳公集

○源 紅葉 志のほくのあめ

○列子注

○我身ノキヌヲイマタ人ハシ

ヲ子ハ我心ヨリ思ヒテ人ノシリタラシ

ヤウニ思フヲ云也

さくらのふり

心限

後拾遺ニ

さくらのふり



古今誦 美人を  
思ふよふ人のうららのくゆらぬあはれさへしんかきかた

うららのあけ

山家集上

あはれよふうらのあけをきかぬりしあはれし月をあらあけ

目下

あはれよ 神の人のあけをきかぬりしあはれし月をあらあけ

万代立一

うららのあけ 心端

隆信集卷六

あはれよふうらのあけをきかぬりしあはれし月をあらあけ

うららのあけ 心穢。誤字カ可考

茶をゆず

あはれよふうらのあけをきかぬりしあはれし月をあらあけ

うららのあけ 文ニハ多クイハ

茶をゆず

あはれよふうらのあけをきかぬりしあはれし月をあらあけ

万代立一 大宰師親王教道

拾玉四 廿四



曾丹集  
あひさるんつるをいしり母えんと字あや  
後拾雜頭

さくらゆり

梅屋二

さきやまの浦にさくらゆりあやのさくらゆり

○

さくらゆり 免

月詣集雑下とさくらゆり

清晡朝信

○千雜中送

さくらゆり時あはれさくらゆりさくらゆり

のほろとゆり 推方 ○同 同のあはれ事しをさくらゆり

國の浦さくらゆりをさくらゆり 云々 康和 ○

さくらゆり

異本拾玉

さくらゆりさくらゆりさくらゆりさくらゆり

○

さくらゆり

今様とさくらゆり

長明無名抄下又けさくらゆりをさくらゆり ○



このもかのも

大井川行幸和哥序 躬恒 大井川のこのもかのも○

長明無名上 このもかのも 活端の他山にをみしを因崎三

位 せんせしき 多々を活端の序を以て陳せり

精舎の 所々の内

夕つゝをさしやをを端をすつふかをのりし志これふし

百代天下 人丸

美濃 多々活端の山をえつゝこのもかのも花さく

後撰和歌 人丸

山れのふさの活端のこのもかのもこのもかのも

○袋中子三

○神中十五

保憲女集

このもかのもこのもかのもこのもかのもこのもかのも

統後多中 人丸

美濃の多々活端の山をえつゝこのもかのもこのもかのも

○躬恒假字序漢河 = 鳥鶴ノヨリ = ノ橋ヲ渡

テコノモカノモニ行カワ○源タ 列 りんて小

家の子母はけりけりけりけりけりけりけりけりけり

このもかのもこのもかのも○

このもかのも

強装束

海人藻艾云凡装束の衣紋上代ハ 泖汰母及る

鳥羽院のほりけり強き装束を以て此の衣紋の

泖汰母及る鳥羽院上代ハ 凡装束とて小き

身を強くハ 不調ハ 然而鳥羽院にあり人の歌を書

大装束  
ふくこ











しる書ちしる〇

ふんはもつうぬ

万代五

まじりていふこと

修乳

みづりていふこと

散木

八言

ふゆり<sup>端</sup>のみみ

尚書會 ころらゝのあみ四帖を

一の長者

権<sup>コシ</sup>カ北<sup>キタ</sup>カ、妾

花<sup>花山</sup> 権<sup>カキ</sup>カ<sup>ニ</sup>の、めてめて多〇今昔十二

般若寺ノ観賢僧正ト云フ人権ノ長者ニ

テ有ケル

十一言

亦のまじりていふこと

古今秋下

信遍昭

保憲女集

〇



語林類葉卷之八

佐行

さの部

二言

さう表

拾遺雜多 抄中のさうはあまをけり。法源のさうはつら  
さうり。さうら。

さけ 魁

和名

○ 字鏡

○ 保憲女

清水濱 臣輯



集詞 けとりよりの冬出くもそ ○今昔廿八廿五 枯  
鮭ヲ太刀ニ帯ケテ

さし 祝

茶花 月宴 さしとみさすけに ○同同廿七 女房をらひとら  
くさしとみさすけに ○同同廿七 さしとみさすけの冬もあはれ ○宇河原  
条使 えげんぞれぞれとみさすけの冬もあはれ ○後撰  
意田新あけさすけとみさすけの冬もあはれ ○茶  
花 玉巻 さしとみさすけの冬もあはれ ○  
約

さし 造入のいしりさし 分類菴條委注

宇河原 さしとみさすけの冬もあはれ ○

させ あな ○古説つとみさすけの冬もあはれ ○  
後拾遺序 あなとみさすけの冬もあはれ ○

さし 俗語のいしり

○ 万代き 為家 細代とみさすけの冬もあはれ ○  
田上河もあはれ 茶花ハ



さし

大和物語 清ささくさく 雨にも 遍昭カ家

さむ

中勢内侍日記 月ハあけゆくまじりて 〇同

山家下

〇古撰 可考 近來波憂身衰氣里奈良山之青木

之下葉色哉替礼畱

さ海様

源氏論義跋 思ひも 〇源

具頭作弘 〇太平記 主上笠置 其方様 カトオホ

安三年也 〇同七 先帝

工タル男女ニマタニ立ナラヒテ 〇同七 先帝

信先帝ヲサシテ 上様ニハイマタシロシメサレ候ハスヤ 〇同

同十八 金崎上様ノ事ハ 義頭ノ一宮 〇同

世五 北野通 十ト關東様ハハ 〇同

ハヌヤラシ 〇著聞十五 〇同十七

〇中勢内侍日記 後宇多弘中







○ 酒 若菜 色ハナキ母ノククノクノ母ノ母ノ

○ 同 未摘 汚色ハナキ母ノククノクノ母ノ母ノ

七<sup>世三</sup> 真サヲニ光ル 物有リ ○ 同 同 真サヲニ光

夕リ 野楮ノ 怪ナリ ○

三言

和名冠帽具筭子蒼頤篇云簪筭也 釋名筭 音雞

音如才 係也所以狗冠使不墜也 ○ 字ハ係 北音

多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup> 多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup> 多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>

○ 讚岐日記 多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>

中<sup>音</sup>中<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>

○ 樂花 女房ノ肌髪 多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>

○ 字ハ係 藏本沖津白浪 多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>

多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>

○

草座

和名抄 ○ 樂花 音 二三人ノクク

之<sup>音</sup>之<sup>音</sup>多<sup>音</sup>多<sup>音</sup>母<sup>音</sup>母<sup>音</sup>海<sup>音</sup>



さかー 冊子 雙紙 草紙

拾玉集真書 雙紙 ○ 百代雜王人の雙紙をう  
せう云

さうー 精進

菊花 月宴 廿七 さうー 冊子 ○

さえー

百廿 やらうきの花いふらふいふいふの左妻方をうまひ

さえー ○

さおー

徹正記物語 譲りけいさくの田の園んをうまひ

いつけておろそかえまひる 注云さあひいふ 月子あひまひ ○ さいふ名時を

いふ事ぬるー 古事記傳 冊子 さえー 冊子

冊子 あまて田分うまひをうまひー ○

某のさかー

後拾雅一 連夜看月 軒家 志す 多くのゆくのちやつさうさむ月のさかーいふを説き

月のー  
野のー  
山のー











々ノ田樂ヲ〇賦人奇合サ、テヌリ〇撰集抄

さしみ

康富記文安五年八月十五日 云云二献冷麵居  
之鯛指身居之

さしき

納云とのさしき  
玉亮 二条のさしき  
お源のさしき  
納云とのさしき

サシキ  
サシキ

さしき

〇さしき  
浦、別

さしき

授衣ニ上ヤ十

さしき

百代村上 源季房  
さしき







さしほし

散本七五上 百中五  
神を 立ち 百の 子孫 ありて さしほし せん 君を  
山 川の 道の へ せん せん せん せん せん せん  
曾冊集

さしほし 早穂田丸

十三上 田

○ さしほしの 道の へ せん せん せん せん せん せん

さしほし 肆。字彙既刑陳其戸日肆

竹取ゆりさしほし せん せん せん せん せん せん

さしほし 申日。子日の 俗母 同 即初申

梅茶一 及び 祭  
さしほし せん せん せん せん せん せん 神 せん

○ シカアル 日 ト イ フ 意 ナ カ ケ テ ヨ メ リ ○

四言

さいつゑ サイツエ イサイ 同 意 カ

字つ 係 夏 原 君  
さしほし せん せん せん せん せん せん

和名抄

和名抄 鑄  
た比津 惠



さいせい 未配刀

紫日記上<sup>廿四</sup>人の海とさういさいせいをわくおきぬ  
〜の〜〜〜

さいせい 最果

枕冊子十<sup>共</sup>さいせいの事い〜ん人〇筆也  
又さいせいといふは〜ん書也〇

さう〜〜 九太〜〜〇〜〜〜と〜〜

さう〜

竹取髪あけぬ〜〜〜  
以〇愚管杵之痛〜〜ぬ〜〜  
細云〜人母内覧〜〜  
子細ナリ也此〇

〜〜み

古事記

〇万葉十六右傳云 中畧 爾取夫君更娶他妻正  
身不未徒贈衷物〇落く源四〇〇源氏未摘〇  
同葦木〇同総角〜〜みぬは〜海云  
句云ナ



さうのて 草書

源 少女 ぶらみくはらううらうら海せ○

さうみ 逆髪○ サカアミモサカシカモ髪ヲ逆ニトリ尾ヲ逆ニツカミテノ意也

竹取 さうみをさうみかへん

さうみ 逆尾

竹取 さうみ 里をうらめてさうみのかほやけ人のいせを  
さうみせん○

さうみ 坂中

隆信集

さうみ 風うらみ ちかき心のほろろと雲を掃く

○

さうみ

菜む 手のうらみ さうみ ちかき心のほろろと雲を掃く

さうみ 中畧 僧正のちかき心のほろろと雲を掃く

さうみ 〇

さかうみ















続世継

うまみ

うまみ

うまみ

うまみ

○茶花

海と別

うまみ

うまみ

うまみ

やけ 今俗ニイフモヤシニ

和名抄菜美類黄菜雀高錫食經云温松辛是人

作黄菜常所嗽者也

黄菜俗云佐以

○延喜式

内膳漬春菜料蔓菁黄菜五斗

料塩三斗

粟三斗

祭使

うまみ

うまみ

うまみ

拾遺物名

うまみ

うまみ

源 若菜下

うまみ

○今昔廿九

陸信集 菅冠分

うまみ

山家上

うまみ























ふくみえり

拾五七 七七

大和物語

〇 宇門深

〇 宇門深

永久四年百

肥後

コ・ロ・ナシ  
ト云ニ返シ

拾五七

〇 宇門深

〇 源 宿木

〇 源 宿木

拾五七 葉盛

〇 源 宿木

公任集

〇 源 宿木

古本志摩集長玄

〇 源 宿木

新朗 新朗

〇 源 宿木

山家集上 凡茶落也

〇 源 宿木

月詠集上

〇 源 宿木

山家下

〇 源 宿木



新古今雜下 資実

保憲女集

月詠二 大納言時忠

一とせをたれし 花の影を多たしとをみしとて

○宇門保 美夕治 上進幼 多るらたれしや

○同 祭使 君重らたれし 多しひらたれ 〇紫苑 玉花

〇同 祭使 君重らたれし 多しひらたれ 〇紫苑 玉花

こゝのよ歌 里ノカ称

後拾誹諧 世中たれし 〇同 所著 紫苑

て祭つりし 浦月し 〇同 所著 紫苑

りきと 長能 〇

さくらんも

源氏鏡角

〇 〇

六言

こゝのよ歌 神柳下云コ、ロカ

新猿樂記 弓吉備大臣 七佐法 王之道習傳者也

サカキハラ







さくさみのしめは 未詳

拾玉四

母多し... 今浅草市にサツキと... 葉捲ん...

さくさみのしめ

後撰雜四

いづれんと... 久殿お方撰... 神保...

○

さくさみの神

山家下... 又亦十三回... 神

十一言

三十六町一里

玉の川... の世より... 猶記書を... 龍馬... 今朝の



一里の別れ也、雲のくもを立て、雨の別れ、くもを立て、  
其道、くもを立て、七十里とあり。○拾遺抄中田藉部云  
廿六町為一里、廿六里為條。所本、上ノ里ノ  
此、作レリ古本ニヨ。○  
テ、ユ、ニ、イ、タ、ス。

十二言

さげきつら〜  
五月宴 ○拾遺表、傷女孩、八歳、母、  
う免か、を、作、て、み、ゆ、り、。

一の部

一言

詩の、う、ま、む、の、ま、て、文、を、も、詩、詞、の、名、解、ん、と、  
枕冊子十二、六、声、ぬ、五、の、秘、つ、を、お、ま、り、と、  
詩、を、多、く、お、ま、り、と、是、を、朗、詠、禁、中、鶏、人、  
曉、唱、声、驚、明、王、之、眠、  
漏、刺、某、ノ、文、ニ、テ、  
都、良、杏、ノ、作、也、

二言

尿、の、シ、ト、ハ、シ、ト、カ、ヨ、ヘ、リ、女、陰、ノ、古、言、ホ、ド、今、  
ホ、ト、云、ニ、同、例、カ、  
散、木、集、雜、う、ち、ま、あ、り、し、を、う、け、て、あ、ま、り、  
し、に、あ、ま、り、







志

散木七巻上

多のうらみとかいへば酒の酔ひはあふつゝ海も解さすまふ

みまを口ゆゑ新島のまきやとむらん月か一海に千鳥の

統後拾九

月詠 頭昭法郎

すりほ 兼基下 松原の海に月を

みまを口ゆゑ新島のまきやとむらん月か一海に千鳥の

人まきれ 兼基下 松原の海に月を

入ニ 兼基下 松原の海に月を

夫不世六 兼基下 松原の海に月を

統古今林上 後鳥羽院

星のあはれの多しめ 烟んやそ月のてし海の文を

○十載序あそちのし海に

全葉 後鳥羽院 七十七のさめし海の海に

景一海 カマノ轉

暴風 アカラシマカセ 紀 ○ 陌 ヨロサノミチ 紀景行

○ 歎 アカヤマ 雄畧紀 ○ 詭 ヨコシマウス 應神紀

汁















思ひの海の日記 抄屏れの下法色紙前の ちりちり

一〇

あつちの 俗言ニツレオナルト云ハ此シツレノ上畧ク

有志船名 仲云

あつちの 海 船名 仲云

曰後云々 列廣

曰 親隆 船名 仲云

曰 船名 仲云

曰 船名 仲云

曰 船名 仲云

曰 船名 仲云

散木 行海書

船名 仲云

○ 抄云 志 船名 仲云

船名 仲云

○

鳥名

字鏡

心 船名 仲云

船名 仲云

船名 仲云

○



志々々 書即

中務内侍日記 志々々のあつたるの巻の巻目

志々々

十二中

志々々のあつたるの巻の巻目 志々々のあつたるの巻の巻目

史本十四回

後大系門大旨

史本世一

常盤井入道右大臣

史本世四

西行

志々々のあつたるの巻の巻目 志々々のあつたるの巻の巻目

○

志々々 芝居

隆信集下 五十二

志々々のあつたるの巻の巻目 志々々のあつたるの巻の巻目

史本院親王家五十二

野宮九大臣

史本九

志々々のあつたるの巻の巻目 志々々のあつたるの巻の巻目

史本九

後葉集 羽政

志々々のあつたるの巻の巻目 志々々のあつたるの巻の巻目

○

志々々 縛

史本九

茶役

志々々のあつたるの巻の巻目 志々々のあつたるの巻の巻目



志ひ

張物、用、具

拾玉四十

そきも つかいあゝしむもさうさひし とうりくもくさひ

○ 行阿假字遣

○ 和訓祭

志ひと 死人

知顯抄 志ひと 目を 志ひしりり

志ひふ

景花

四十四

清原多志ひの女志ひも

谷川氏ハ  
ふわきと

おしと 志ひしりり

志ひ

契云重吹人の 風吹花の 東野お云シナリキシル一ニ

新古今

家徑

多志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり

又木四

後鳥羽院

花志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり

清原多志ひ

志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり

名所

○ 歌集 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり

志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり

志ひ

夫不ニ 長方

志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり 志ひしりり



○ 聖子 〇 源 女  
〇 聖子 〇 源 女

繁々の 〇 源 女

〇 聖子 〇 源 女

下屋

〇 聖子 〇 源 女

草名未考 〇 草ノ下ニシテキトイフハアリテ和名

隆信集物名 〇 草ノ下ニシテキトイフハアリテ和名

〇

某志 〇 草ノ下ニシテキトイフハアリテ和名

〇 草ノ下ニシテキトイフハアリテ和名

〇 草ノ下ニシテキトイフハアリテ和名

〇 草ノ下ニシテキトイフハアリテ和名

白髪

老











裏にゆきとヤリきそ○宇治拾遺ニ十七  
志をいじり  
多し、けしは志を神にさそあき又云陰陽師を  
かみして志をさそりて又云ふのき多し  
志をいじり死ゆぬ又云志をさそりて志を  
ハ○盛衰記十晴明カ天文ノ洞源ヲ極テ十二  
神將ヲ仕ニケルカ其妻職神ノ貞ニ畏レハ  
彼世ニ神ヲ橋ノ下ニ咒シ置テ

志をいじり

宇治保 参使

志をいじりぬめきあき志をいじりぬ

○同 同

○塵添埃囊抄一色弗シヨフナ○

獅子舞

樂色 音楽

樂所乱声えもいじりぬしりきい志をいじり

もいじりぬしりきい志をいじりぬしりきい志をいじり

鏡 ヨロイ

法臺のありし海もが神をいじり

鎌倉若  
末祭ナ云

舞樂田樂獅子からやふく免解し下につけあらし

おもいじり ○著聞集○

志をいじり



















都士産 志原の浦に新つた女神体、わろ志原  
いほあてりあせり。

借家

康富記 近所之借家。

序跋

愚問賢註序 長基

○都のつゝ同 ○重穂花開  
書 卷未 彼書 記 即日 の序にしを 侍り あり 文  
の 詞を 女子 母 日記

ヨ漢文ニテカキタルヲイハル  
ナリ此項ノ日記漢文ナラハシ

拾遺草下 白沫

○ 雪しりあけ 女良 髪きえ 秋をいふ ちのり

源

源 井川 白 〇 已 抄 〇 今昔十九 三 条 飯 子 皆  
泥形ニノ踏ニ成ク 嗽シヲカラ音ヲ聞テ〇同











高野日記

高野日記

高野日記

小町集

公忠集

文木士右衛門

○ 高野

三十八

高野日記

志々々々々

源 真木柱

高野日記

高野日記

長明無名下

○ 高野日記

高野日記 推本

源氏巻名

高野日記

○

高野日記 スレシム











きりぎりす 知音

都のつと 宗久 けしき 多きありあり 〇雪舟のみ

のこり 〇言はきりぎりす 〇あきあき 〇あきあき 〇

源 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

きりぎりす

紫 〇月宴 三十三 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

きりぎりす

和名抄容飾具粉文選好色賦 〇著粉則大白 和名

之路岐 〇枕冊子 九十一 〇あきあき 〇あきあき

〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

〇四季物語 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

〇あきあき 〇二条大皇太后宮大貳集

白花

新古雜上 〇月宴 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき

〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき 〇あきあき







六帖 三ツヤ

十載松上

換衣一

月の人志をうらむるの如き

○源 梅

常川

保憲女集

玉月心志をうらむるの時

○源 横笛 月をうらむるの如き

つとむるをうらむるの如き

志あぬるる

竹取傳 不死の系入

同帝

あつとむるをうらむるの如き

○

志あぬるる

借老同定 毛詩

新六あひかき

元後

あつとむるをうらむるの如き

中朝内侍日記

あつとむるをうらむるの如き

志あぬるる



枕丹子

古今

志の月の秋の源

若菜

女の心の

月ハ人毎多いて夕て多ふけり色と○新撰楽記雖致  
気装取無愛人死如極寒之月夜○空植 花開中

け志の月の秋の源の月夜○空植 梨産の

源内侍 ○源 朝彩 月夜○空植の心けり

源内侍 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

志の月の秋の源

今川貞世道中

志の月の秋の源

志の月の秋の源

志の月の秋の源

古今 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

拾遺草上 同雪 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

新撰楽記 入道大政大臣 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

続後秋上 順徳院 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

下代抄下 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

拾遺草上 志の月の秋の源の月夜○空植の心けり

○契沖頭書云古今集の志の月の秋の源の心けり







ねとらむつゝもしりきえ 赤津湯門

○家集元○伊勢大

輔集ニアリ○玉雜五ニアリ

ニ余天皇太后宮大貳集

いづるもふりくしん古のあかき竹きし道の道

○同 又一首アリ

又本廿六 定家

苦のい母 埋地女名をい ねしきも ねのたやきしゆふ

○十載序きし道のたも 甚かきしりて○

あふりつひつゆ

換衣三下三三

玉しひの あふりつひつゆ ねしきも ねのたやきしゆふ

○袋中子

あつちの小巻

シラノマロヤ

十載 芝 野 同 意 四

あつちの小巻 ねしきも ねのたやきしゆふ

新古 歌 徳大寺左大臣

催馬楽

あつちの小巻 ねしきも ねのたやきしゆふ

あつちの小巻

愚管抄 秋吹風のそらきき 野分ぬの 新し 催

馬楽 律 逢路 あつちの小巻 ねしきも ねのたやきしゆふ







如左○

志のそい 宿老之并

思得日記大將志のそいをいつて宿老のそいとや  
らゝえ弘也。故殿の中いふ海をいふとや  
○同志のそいの人いふをいふ○

九言

志のそい

源 須 丁 世に志のそい 志のそいの人多しあり○演松

三志のそい

十一言

正月おまのそい

修正

今昔十九世一 修正十ト行モ必ス此僧ヲ尊

師ニシケリ其行ヒノ餅ウ此僧多ク得タリ○

同廿八世六 无勤寺ノ修正行ケルニ七日既ニ畢

テ○後撰雜四知いふも多し母志多し人かつる

志のそい月おまのそい出づるの讚岐日記一年

の正月に修正志のそいあふも多し志のそい志のそい







